



内科初期研修医と指導医の徒然

沖縄県立南部医療センター・こども医療センター 内科 仲里 信彦

臨床医の世界では、まだまだ若手といわれ、自分自身でもそう思っている。しかし、年齢的には他のプロフェッショナルリズムの世界ではどうだろうか？ “角界においては、すでに引退し、親方になっている人もいるレベル。プロ野球界でもすでにいぶし銀から引退し、コーチになっている。” 状況であろうか？ 私が指導いただいた指導医の一部は、すでに引退され、私自身も初期研修医時代に出会った指導医の年齢に達してしまっただけ！ 初期研修医との出会いを繰り返しているが、そのたびに自分の初期研修医時代のことが、まだまだ、最近のように目に浮かぶ。かつての指導医もそうだったのだろうかと考えが巡る。しかし、ここ最近の回診時に、経験・体験談をEBMの前に言い出してしまう事が、精神的には老いてきたといわれ、研修医に対して注文が多くなっていくのは自身の初期研修医時代を忘れかけている証拠ともいわれる。その点を、時々、反省をしている。

現在、私が属している科が総合内科ということもあり、ダイナミックな検査手技を自ら行うことは少ない。実際、研修医指導の場面のほとんどは、入院患者のプレゼンテーションを受け、そのアセスメント・プランを確認する事や患者回診の場面で、病歴を再聴取したり、身体所見を一緒に取り直すことに費やしている。初期研修ローテーションの中で、内科研修が最も期間が長いというのは、なぜだろうか？ 単に成人人口が多く、高齢が多いと言うだけではない。内科研修においては、どの科に進もうとも必要とされる“診断能力”を獲得するための基礎の期間と考えたい。病気の診断のための各種

検査方法や検査項目を覚えるのが中心ではなく、医師が患者から病歴を聴取して、身体診察をする過程の中で診断を進める事を学ぶ場であろう。学生時代に数学を学んだ理由に似ている。私が所属しているような市中病院に初期研修を望んできた研修医からも“検査診断学を学びたいのではなく、患者診察の中からの診断能力を獲得したい”と口々に言う。これをつぶさないように私たち指導医の努力が必要である。

診断能力の獲得のために、主訴・年齢・性別からある程度の診断を思い浮かべて、病歴聴取の際にはopen-ended questionだけではなく、思い浮かべた診断を元にclosed questionを付け加える。鑑別診断は、主訴や病歴聴取から浮かべたものだけではない。一連の全身の身体診察に加え、鑑別診断を思い浮かべながら取った特異的な身体診察の情報から、再度病歴に立ち返り、追加の問診を行う。これらの繰り返す作業から鑑別診断をさらに絞り込んだり、追加することが可能となり、より正確な方向性が見いだせるだろう。ただし、最も可能性の高い疾患のみではなく、必ず対立した鑑別診断も挙げる努力を惜しまないことを初期研修の際に忘れてはいけない。患者を直接診察しないカンファレンスの時のように、単に鑑別疾患を分類し、数多く挙げる方法ではなく、これらは効率よく正確に診断を進めるための方法である。しかし、そのためには幅広い患者さんを数多く診る経験がなければ、なかなかうまくいかないという矛盾はある。だからこそ、そのための指導医が存在するのではないだろうか？ そこで、指導医は、方法論のみを伝えるのではなく、その経験

をうまく伝えるために、常にベッドサイドに立ち寄り、自ら実践する態度を見せる必要がある。そこで、指導医は、患者を診察した際に専門外として切り捨てる部分をなるべく少なくし、可能な範囲で“問題解決型の学習態度”を繰り返す姿勢を示すべきだろう。救急外来のみでは、いわゆる患者さんが“一見さん”となってしまう、研修医が初療医としてたてた診断・評価が正しかったかどうか疑問も少し残る。入院患者を中心に初療医は、患者の診断・治療に伴うストレスを感じながら経験するとより効果的ではないかと考える。それに加える形で、外来患者の疾患の違いやそれへの対応を行えばさらに良いと考える。

“学ぶ仕方”は、現に“学んでいる”人からこそより学べる。教える立場にあるもの自身が、“学びの当事者”であることが必要といわれている。指導医自身をもって“学ぶ”とはどういう事かを示す（ベッドサイドに立ち寄り）ことが、最も研修医へ伝えることだろうと考

る。これまで、初期研修医時代からお世話になったかつての指導医がそうであった。ネタバレしてすみませんが、映画“ディアドクター”の偽医者ですら、患者をケアする際に必死になって学び、それを見た彼の元にいた研修医が“医師たる態度”を学んだ場面があった。初期研修医も“医療に対する真摯な態度を示す指導医”を見分けられなければ、いつまでも“青い鳥症候群”や“隣の芝生は青い”状態に陥ってしまい、自分の居場所を探し続けてしまう。

最後に、映画“STAR WARS”のオビ=ワン・ケノービはメンターとなる師クワイ=ガン・ジンと出会い、マスター・ジェダイとして大成した。途中でメンターを見誤ったアナキンはダークサイドへ落ちた。指導医自身も目標とした（目標としている）メンターとなる医師像があるはずであり、それがなければ、初期研修医へ指導することは困難であろう。初期研修医の方々も我々も、メンターを誤り、ダークサイドへ落ちないようにお互いがんばりましょう！！

